

大分における^{あま}蛸人の系譜
— 『臼杵博識誌』と湯治舟—

田畑博子

熊本大学社会文化研究13 別刷

2015

熊本大学大学院社会文化科学研究科

大分における^{あま}蟹人の系譜

— 『臼杵博識誌』と湯治舟—

田 畑 博 子

キーワード：大分県、家船、あま、臼杵博識誌、湯治舟

1 はじめに

海に住む人々—漂海民・^{たんみん}蟹民・^{えぶね}家船・^{あま}蟹人—これら漂海民について、広くは中国大陸南部から東南アジア、日本に分布が確認されている。2014年春、ヴェトナムと国境を接する広西チワン族自治区南寧メコン川上流で、蟹民と呼ばれる水上生活者の舟を見る機会を得た。現在はメコン川に住む人々も時代とともに少なくなり、定住する方向に進んでいる。その他の多くの地域の水上生活者も定住化を図り、海、川の水面上に住む人々の歴史は人々の記憶から消え去ろうとしている。

伊波普猷は『日本文化の南漸』で、柳田国男は『海上の道』で日本民族の移動について言及している。海に囲まれた日本の民族移動手段としては船しかない。この船に係わる操船集団として「あま」がいる。この「あま」の歴史的発展や展開の全体像を掴むには、その実体はあまりに広汎で捉えることが難しい。そこで筆者の在住している豊後（大分県）における「あま」の残滓について論及する。

^{あま}蟹人は家船を含めた「あま」という概念を統括した名称である。「あま」という語が含まれている例として次のようなものがある。これらはいずれも「あま」族の移動に関する事例である。豊後の海部を始めとして奄美では大島を開闢した阿摩彌姑と志仁礼久が降り立った地がアマンデーと呼ばれている（笠利町）。また沖縄では琉球の創世神として久高島の^{あまみくしにれく}斎場御嶽に祀られるのが、アマミキヨである。祖神アマミクは国造りを始めた神で、国王が聞得大君を伴って礼拝を行っていた。外間守善は『沖縄の祖神アマミク』の中で、「アマベ（海人族）」について伊勢から沖縄までの足跡を辿っている。外間守善もここで「あま」に対して「アマベ（海人族）」と表現に腐心している。この海を移動しながら少しずつ定着していった人々についての論証は、些細な民俗事象から論じていくしかない。マクロ的視点で「あま」という語は多くの意味を内包している。本題名は「あま」を『臼杵博識誌』で表記された^{あま}「蟹人」とした。

海に住む人々を何と呼ぶか。研究者によってさまざまである。羽原又吉は「漂海民」とし、W・G・ホワイトが「海のジブシー」と呼んでいることを紹介している【羽原1963 2頁】。また『日本民俗大辞典』によると家船という名称は長崎県西彼杵郡だけに通用する名称であるという。瀬戸内海の能地やその隣の二窓では家船を^{ふなずまい}「船住居」と呼んでいた【沖浦2003 295頁】。しかし本稿では民俗用語として定着している家船を使用することにする。民俗学をはじめとした人文科学では長崎県という地域的な文脈を離れて同様の特徴を示すものを総称する言葉としてこの「家船」を用いている。では家船とはいったい何か。羽原又吉は『漂海民』の中で漂海民を次のように規定した。

- (1) 土地・建物を陸上に直接所有しない。
- (2) 小舟を住居にして一家族が暮らしている。
- (3) 海産物を中心とする各種の採取に従い、それを販売もしくは農作物と物々交換しながら、一カ所に長くとどまらず、一定の海域をたえず移動している。

本稿では家船もこの羽原の規定と同一であるとする。家船は船そのものを指すのではなく、漂海民の総称として考える。これら漂海民の生活の伝承を少しでも書き記すことが喫緊の課題であると考えられる。

この海上に住む人々＝漂海民、家船についての研究は辻井善弥が「家船と潜水漁」で指摘しているように、それほど進展を見せていないというのが現状である。それは陸上がり、定住化が促進され、記憶から消えて時間が経っているからである。しかし金柄徹が『家船の民族誌』で1998年に広島県豊田郡豊浜町豊島に多くの船世帯があることを指摘している【金2003 1頁】。大分県を見ると、1980年代まで大分市佐賀関町一尺屋の通称ハワイに、毎年春になると2艘の家船がやって来ていたという話を聞いた【注1】。大分県は海部郡を控え、古代より「あま」の集団の遺跡や伝承が多く残る地域である。しかし近年これらの伝承も薄れ、この家船について、地元に行ってもその存在を知っている人は少ない。そこで「あま」に関する資料として『臼杵博識誌』を取り上げた。『臼杵博識誌』は江戸時代後期に書かれた和綴りの文献資料につき判読が難しく、大分県先哲史料館に残されている『臼杵博識誌』から「蜃人」の項を翻刻し、解説した。さらに別府市にかすかに伝承されている「湯治舟」について述べる。この湯治舟は、1934（昭和9）年地元の俳人の要望によって、高浜虚子が『歳時記』に春の季語として取り上げその存在が記録に留めておかれることになる。その後しばらく忘れられていたが、秋吉収が祖父の残した句集『湯治船』を2009年編纂発行したことにより、再評価されることとなった。この湯治舟と漂海民との関連について民俗的にまとまった論文は管見にして見当たらない【注2】。

2 大分県の「あま」

「あま」についてはその概念が一定していないことが反映してか、さまざまな文字を「あま」と読んでいる。海人、海士、海女、蜃などの文字をあてることが多いが、『豊後国風土記』『万葉集』では白水郎の文字があてられている。中国では「蜃」は福建省・広東省の沿岸に住む水上生活者の総称をさすとされ、舟を家として漁業を生計とし、「蜃人」「蜃子」「蜃民」といわれ、あまと読む【注3】。また他には「魚介をとったり、藻塩を焼いたりするのを業とする者。漁師。古くは海部（あまべ）に属した。あまびと。いさりびと【注4】」ともいわれている。鎌倉時代中期から後期にかけて活躍した公卿の藤原為相郷は、海道宿次百首の歌に「シホミ。暮レテハヤ塩満チヌラシ浦タニ釣船ヲヨセテオルル蜃人」と詠み、1465（寛正6）年前後に成立した金春禅竹の能の秘伝書『明宿集』には秦河勝の相生湾漂着を次のように記している。

業ヲ子孫ニ譲リテ 世ヲ背キ 空舟ニ乗り 西海ニ浮カビ給イシガ 播磨ノ国 南波尺師ノ浦ニ寄ル 蜃人 舟ヲ上ゲテ見ルニ 化シテ 神トナリ給フ

さらに見ていくと1666（寛文6）年に中村惕斎によって刊行された絵入り百科事典『訓蒙図彙』には「蜃人」と書かれた船の上の海女が描かれている。時代が下がると江戸時代文化10年以降に発行された読本には河東東漁の『蜃人少女玉取草昏』があり、次のような記載がある。

今の女ばらの飯をおめし、汁をおつけといひ、鯛をあかまな、鱈をゆきといふ。このたぐひ甚おほし。蜃人藻屑に、内裡仙洞には、一切の食物に異名をつけてめさるゝ事なり。一向存知せざる者は、当座に迷惑すべきものなり。飯をば供御、酒は九献。餅はかちん、味噌はむし、塩はしろもの、豆腐はかべ、索麵はほそもの、松茸はまつ、鯉はこもじ、鮒はふもじ、つぐみはつもじ、土筆はつく、蕨はわら、葱はうつぼ、かくのごとく異名をつけてめさるゝ。ちかき比は將軍家にも、女房達異名を申さるとしるせり。

幕末から明治時代に入っては、日柳燕石、長塚節などによって短歌にも詠われている。

蜃人のあさげたくまの浦けむり、晴たる空にあは嶋の纜とひて見渡せば	日柳燕石
多珂の海の水木の濱に荒波にかじめさは寄るそをとりてたすけにせむと蜃等さはよる	長塚節
潮さみの水木の濱に爪木たく蜃人さわぎ搗布とるかも	長塚節

また現在も続いている新潟県の祭りに『蜃（アマ）の手振り』がある。江戸時代後期（1843～1852年）初代新潟奉行の川村修就が新潟の風土を描かせた絵巻物の中に、この祭りが描かれており、その絵を見ると海女が描かれている。このように「蜃」「蜃人」については漁業従事者、潜水漁民、海女、海士などと多様に表現され、概念規定がされていない。

地名でも海や海部があてられているというように多様化している。「あま」については『豊後国風土記』でも「海辺の白水郎」と但し書きがつくように「海の白水郎（あま）」と「川の白水郎（あま）」の存在が指摘されるがここでは取り上げない。また「あま」と船の居住関係についても論を改めたい【注5】。

現在の^{おほみたら}大分県の大分市から^{みな}佐伯市までをかつては海部郡と呼んでいた。『豊後国風土記』によると「この郡の百姓は、並海辺の白水郎なり。因りて海部の郡と曰ふ」とあり、この地域の人々が漁師であったことが記されている。この中で特に家船について論を進める。

『豊後国風土記』海部郡の条には「この郡の百姓は、みな海辺の白水郎なり。」と記されていることはすでに述べた。また『和名類聚抄』には、丹生など十郷があったとされるが、『豊後国風土記』には^{ほと}徳門郷、^{さい}佐尉郷、^{にう}丹生郷の三郷が海部郡として記されている。この地域の中心は徳門郷で、豊後「あま」族の拠点であった。

また丹生郷には国指定の前方後円墳の亀塚古墳（大分市）を始めとし、同じく国指定の前方後円墳の下山古墳（臼杵市）など数多くの遺跡がある。この下山古墳では被葬者として男女二体ずつ計四体発掘されたが、一号棺の男女の身長が男158cm、女143cmで2体に共通する点は、ともに体格は小柄・華奢でかなり身体を酷使している。二号棺の男の身長は165cm、女は159cmで、二体に共通する点は、ともに体格がよく大柄、骨の発育もよい。そしてこの四体に共通する点としては、ともに外耳道骨腫が認められていることである。外耳道骨腫とは長い間冷たい水に潜っていると、耳を守るために骨が異常増殖したものを指し、水に潜る人々に多くみられる症状である【注6】。このことからこの下山古墳が作られた5世紀から5世紀半ばに、この地域には「あま」が住んでいたことがわかる。この地域の海部郡という呼び方は、郡区町村編成法（1878年）以前の名称で、施行後南海部郡、北海部郡に分けられた。その後北海部郡は佐伯市に合併され2005年1月に消滅した。さらに2005年3月に南海部郡内全町村が佐伯市と合併し、佐伯市となったためその名称は完全消滅した。この地域は名称のとおり「あま」が多く住んでいた地域とされ、その「あま」は船で移動してきたと地元住民にも考えられている。そしてはるか彼方から移り住んできたという言い伝えも残っている。大分県臼津関地

方振興局の作成した『保戸島—まぐろはえなわ漁業の歩み—』には、羽原やその他の研究者の説を取り入れ「島内には様々な伝説や民話が残っており、古来より伝わる漁労技術は紀元前4～5世紀ごろに中国の江南地方に住んでいた「あま」族が漢民族に追われ、黒潮にのって台湾・沖縄、九州へと移り住み伝えた」としている【大分県1993 8～9頁】。保戸島は現在でも遠洋漁業の基地として名をはせている。島の周囲がわずか4km、人口1,400人の島である。この保戸島は柳田国男『海南小記』の出発地点でもある。

このように大分県は漁業が盛んであるが、その漁法にも特徴がある。大分県にある漁労技術として、臼杵市下ノ江港に伝わるカジキをねらう突き棒船、津久見市保戸島に伝わるマグロをねらうはえ縄漁船が有名である。さらに「あま」との関連を考えて大分県の地名を見ていくと、宇佐市安心院という地域がある。この安心院については安曇との関連が考えられる。谷川健一は八世紀初頭の豊後国海部郡の戸籍に阿曇姓がみられるところから、阿曇氏の勢力の浸透が見られ、白水郎は阿曇氏の統率の下にあったとしている【注7：谷川1995 23頁】。

羽原又吉はこの安曇海人について、筑前、豊前の沿海地帯に分布した海住民と大和朝廷に対して妥協的隷属の関係をとった安曇海人とは、大和朝廷から見ると熟蕃生蕃の区別があったとしている【羽原1949 169頁】。

写真集『目で見る佐伯・津久見・臼杵の100年』を見ると、その中に臼杵の家船えぶねの写真が数枚ある。簡単な骨組みの柱と梁に布がかけられた小船である。今となってはほとんどの人がその存在を知らない。

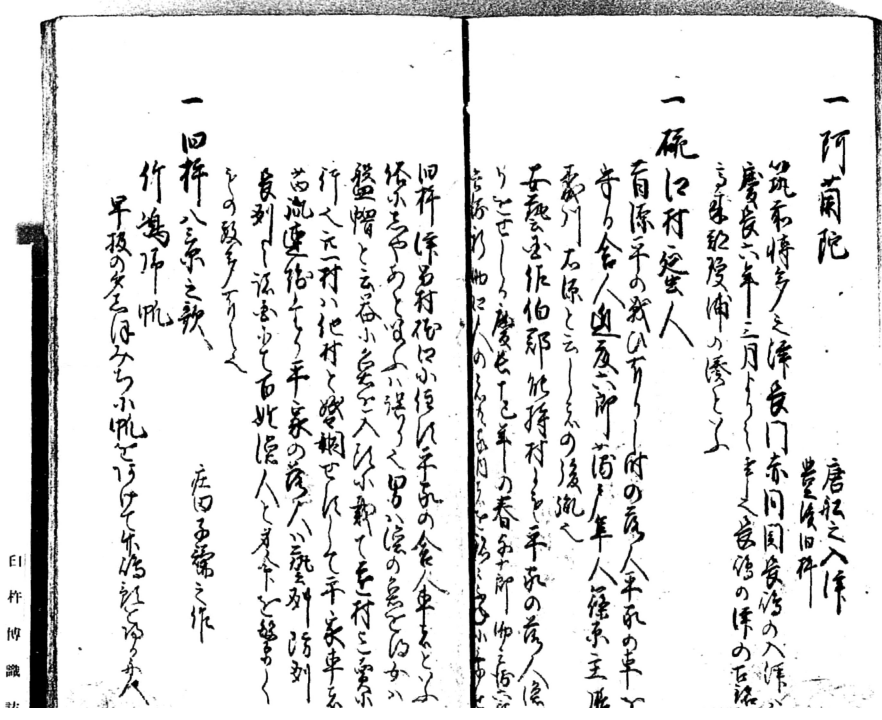
1919（大正8）年5月に柳田国男は臼杵の家船を見ている。この九州への旅の前に柳田は中国旅行をしており、蛋民に興味を持っていた。『清光館哀史』に次のように書かれている。「それで用事を作って長崎に行き、平戸へ渡った。平戸の北の方にある大きな海女村を見たり、また大分県にあるシャアと呼ばれる海上生活をする人たちや、家船を見に行った。」その光景に刺激された柳田は『海南小記』の旅を臼杵、保戸島から始めるのである。

日本の家船の系統は能地系統、肥前瀬戸系統、鐘ヶ崎系統の三つと考えられ、瀬戸内海には二つの系統の家船があるとされる。一つは能地であり、もう一つは二窓である。【羽原1963 105頁】大分の家船は能地系統であるが、羽原又吉はこの大分の家船に新たに津留系統という概念の可能性を指摘し、系統の再検討の必要性を説いている。これら系統の分別は漁業の手段の違いによってなされている。

3 『臼杵博識誌』

家船について書かれた史料として『臼杵博識誌』を最初に引用したのは、羽原又吉『日本古代漁業経済史』である。『臼杵博識誌』は、現在大分県立先哲史料館に残されている。和綴じの文書資料である。羽原は1882（明治15）年大分県岡藩の侍医の家に生まれており、彼にとって『臼杵博識誌』の翻刻は必要なかった【注8】。文書資料を読めることは当時の知識人にとっては自明で、羽原は必要な箇所を論文に引用した。しかし『臼杵博識誌』は翻刻されておらず、家船の研究者が『臼杵博識誌』を引用しているが、羽原の引用を踏襲している。新たな考察を得るためにも原典を見る必要性をもった。そこでその『臼杵博識誌』の「蟹人あま」について解説し、解説する。

『臼杵博識誌』の作者加島英国は、1782（天明2）年豊後臼杵掛町の多葉粉屋に生まれる。俳号櫻翁、



『白杵博識誌』

『桜翁雑録』で有名であるが、その他に伊能忠敬が白杵に測量にやって来た際に測量の補助をしていることでも知られている。『東日記』によると本名は加嶋弥平太英国で、若い頃京に上り土御門卿の門に入り、陰陽学、国学を学び、和歌、俳諧、狂歌もたしなんでいる【注9】。そして1854（嘉永4）年に70歳で亡くなっている。英国は寺子屋を開いていたが、煙草屋やその他の商売もしていた。『白杵博識誌』には各寺社についての記述や妖怪譚、炭焼小五郎のことなど巷間の伝承も書かれ、興味の広さがうかがえる。『白杵博識誌』の蜃人の項については次のように書かれている。

一 砥江村（現：白杵市諏訪^{かきのえ}砥江）蜃人

昔、源平の戦ひ有りし時の落人、平家の車を守る舍人近藤六郎、薩摩隼人篠原主膳森川右源と云し者の後胤也。

安芸国佐伯郡能持村にも平家の落人漁りをせしが、慶長十己年の春、与十郎、助兵衛、吉勝、新助、四人の者ども家内は銘々ふねにのせ、白杵津留村砥江に住つ、平家の舍人車者といふ俗にしやあと呼ふは誤り也。男は漁の魚を、婦女は盤帽と云器に魚を入、頭に載て遠村まで売りに行く也。この一村は他村と婚姻せずして平家車者苗胤連結たり。平家の落人は芸州、防州、長州の諸国にて百姓漁人と身命を繋ぐもの数多く有りしなり。（翻刻に際し旧漢字を新漢字にし、句点、句読点を加えた。）

ここでは家船の人々を「平家の車を守る舍人」とできるとし、落人の氏名も書かれている。この名前について羽原又吉は『漂海民』の中で、「口碑によると慶長十年（1605）、五そうの移住者から村作りがはじまっている」とし、「矢田想兵衛・金剛与十郎・樋口太郎・大原源兵衛・竹永六良という姓を

もつ五家族だと伝えられている」としている。ここでは口碑ということで具体的な伝承経路については記されていない。しかしこの『臼杵博識誌』の記述も「近藤六郎」「薩摩隼人篠原主膳森川右源」と「与十郎、助兵衛、吉勝、新助」の六つの名が出てくる。一致する名は「与十郎」「六郎（六良）」だけであるが、伝承されている事項であることや、写本で残されていることからの変容が考えられる。この中の「薩摩隼人」について、『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷の条に「彼の白水郎は、馬・牛に富めり。（中略）此の嶋の白水郎は、容貌、隼人に似て、恆に騎射を好み、其の言語は俗人に異なり」と記されている。羽原又吉は「南方海住民系の一派で、海的生活から山間の生活者となったもので日本史にいふ熊襲すなはち隼人族と見るのである」と肥薩薩隅地方の海人族と隼人族の関係は本質的に同一であるとしている【羽原1949 167～169頁】。

『臼杵博識誌』と羽原又吉の調査からわかることは、出自として安芸国佐伯郡能持村であるということ、砥江村が何人かの移住者により始まったということである。

能地の家船は歴史も古く、瀬戸内の家船は能地から分かれたとされている。沖浦和光の『瀬戸内の被差別部落』には「江戸時代の数多い瀬戸内海の漁村の中でも、能地浜（現三原市幸崎町）は漂泊漁民（家船漁民）の本籍地」とある。また広島藩の各農漁村の『村明細帳』や『差出帳』に「漁師」のあとに「能地村より出職」とあるように能地出身の漁業従事者は、技術を持って各地に定着していった【沖浦2003 292～294頁】。

しかしまた能地の家船も他の地区からの移民で、『能地漁民の展開』によれば、能地にも中世末に紀州から移住したとの口碑がある【河南1987 297頁】。その後牛窓、小豆島、小倉まで能地の人々は、末子相続で嫁を迎えると分家（デイエ）して分散し（寺の過去帳や壬申戸籍による）、集団で移動したが、定着後も親村との関係は残った。墓制については、亡骸を能地へ葬りに戻った。

さらに「俗にしやあと呼ぶは誤り也」という記述があり、別の呼び方を正しいと指摘している。それが何を指すのか不明であるが、羽原又吉はその「しや」を中国福建省の畚族を由来としている【注10：羽原1949 319頁】。現在大分でも残っている物売りの名称「おしゃあさん」は、その名残と考えられる。現在でも大分市内郊外の店のない地域は、週に何回か物品販売車が来る。そのほとんどが臼杵から来ている。市内中心街の道端で貝売りや、野菜売りの人も臼杵から来ていることが多い。数十年前までは、女性が男性の取ってきた魚を盤帽（半切桶）に入れ頭に載せて遠くまで売りに行った。

臼杵市津留の女性は国東から豊肥地方まで広い範囲を行商して歩き、数人で行動した。そして盤帽に乾物を入れ、決まった得意先に頭上運搬をして数日間売り歩いたとされる。

またこの村は他村とは婚姻関係を結ばず、芸州、防州、長州のいくつかの決まった百姓や漁人と婚姻関係を結ぶものが多かった。

4 別府の湯治舟

別府には湯治船、入温船などと呼ばれる船があった。これは近隣からやって来た人々が、別府、浜脇などの浜の浅瀬に泊めた舟に寝泊まりして湯治をする舟をさす。持ち舟で寝泊まりしながら浜脇温泉や別府温泉に通う湯治の習慣だが、旅館がわりに人を乗せる場合もあった。

別府温泉は別府八湯といわれ八つの温泉郷からなっている。この八湯のうち別府温泉は、奈良時代の『続日本紀』には速見敵見郷とあり、平安時代の『和名抄』には速見朝見郷とある。このアダミは「アタミ」であるとし、熱海の転訛と考えられている【別府市1973 31頁】。その後別府は別府八湯

の総称として使用されるようになった。ここでは八湯のうちの一つの別府とする。江戸時代後半から明治にかけては、八湯のうち別府温泉と浜脇温泉が中心であった。

別府一帯地域には江戸時代から「湯株」という制度があったが、詳細な資料は残っていない。1837（天保8）年に書かれた喜田川守貞『守貞漫稿』には湯屋株について次のように記されている。

今世、江戸の湯屋、おほむね一町一戸なるべし。天保府命前は定額あり。湯屋中間と云ひ戸数の定めありて、これを湯屋株と云ふ。この株の値ひ、金三、五両より、貴きは千余金のものあり。株数、天保前五百七十戸。右の湯屋株、自株にて自ら業するあり、または株主と称して一、二株あるひは数株買ひ得て、月収をもってこれを貸すあり。

これは銭湯営業権と解されているが、別府地域も同様に独占排他的な包括的支配権を指している。湯株取得者はおそらく幕府に冥加金を上納して株仲間を組織し、権利の独占を図っていたとされている【別府市1973 34頁】。

この別府八湯のあった地域は、江戸時代天領として高松代官の支配を受けている。そのため湯治客は厳しく制限されていた。それでも別府、浜脇温泉は自家用の温泉が7割から8割を占め、川からも湯気が立つほど湯量が多かったので、多くの人々が温泉を楽しんだ【注11】。明治以降は制限が撤廃され、さらに温泉町として発展していった。

先にも述べたが、浜脇温泉、別府温泉は海岸沿いにあるため船で来て、そのまま船に宿泊して湯治をした。これは幕末の熊本藩野田平右衛門の『見聞之趣左之御座候』に「別府、浜脇両村は旅船日夜出入の湊にて」とあり、この頃は別府浜脇温泉が一番の賑わいを見せていた。浜脇温泉は、江戸時代後期の1817（文化14）年に書かれた温泉番付「諸国温泉功能鑑」では、西の前頭三枚目で別府温泉よりも上位にランキングされ、河口の船溜も湯治船で埋め尽くされていた。現在でも浜脇、別府には戦前の隆盛を留めた遊郭跡などが残っている。この浜脇は、1876（明治9）年の村別舟所有数を見ると83艘で、別府村28艘と比較してもかなり多い【別府市1985 22頁】。しかしこれらの中で50石以上の船は栈橋に着岸できず、舢舨で沖の船と岸とを往復していた。湯治客には海を交通路として瀬戸内海沿岸地域から来た者が多かった。

脇屋儀助が記した小浦村（日出町）の脇屋文書によると、別府へ商用で来た小舟が難破した記録があり、特に周防の舟が多いとある【注12：別府市1985 22頁】。また江戸時代には、防州（周防）に頼母子講の湯入講があった。この湯治船は船上で煮炊きをし、泊まることができた。百姓が日頃から漁師に農産物を送り、農閑期に湯治船を仕立てて入湯にやってきた。別府には旅館もあったが、湯治をする人々は主に自炊をし、泊まるだけの宿が多くあった。

帆柱につなぎある児や	湯治舟	岡嶋田比良
往診のかつぎこまれて	湯治舟	岡嶋田比良
伊予訛	広島訛	湯治舟
		秋吉良聞

これらの俳句は明治時代から大正時代にかけてあった湯治舟の光景を詠んだものである。湯治舟は1888（明治21）年に出された『豊後温泉誌』に「街北ニ濱脇港アリ小船百余艘ヲ容ルヘシ春秋ノ交浴客舟ニ乗リ来遊シ港内ニ填湮ス」とあり、この解説として『別府市誌』には「春の四月、五月の頃になると、山口県の大島郡とか又愛媛県八幡浜付近の海岸の村では、一艘の船に米、味噌、醤油を積み込んで、二・三十人の人が一団となってこの別府に来る。帆をかけて入って来た船は、波止場に繋いで三週間ばかり滞在する」と書かれている【加藤1888 11頁・別府市1985 479頁】。

この湯治舟は、高浜虚子が別府温泉の「湯治船」を春の季語として取り上げたことによって、昭和9年の虚子編『新歳時記』に採録されている。

別府に帆をかけて入って来た舟は、春の別府湾に百艘近くが舳を並べて繋がれていた。俳人秋吉良聞、方子の俳句集『湯治船』にはそのことが詳しく書かれている。

『目で見ると別府百年』には明治24年3月に「入温舟」と書かれた写真がある。また『写真集 明治大正 昭和 別府』には明治30年頃、「名残川（流川）の川口海岸に砂場があり、旅館が立ち始めた」とあり、現在ある大分市から別府に至る国道10号線はなく、海に面していた様子がよく分かる。さらに同書には「別府港の漁舟」として明治30年代の写真があり、屋根のない漁船に混じって藁のような屋根をつけた舟が係留されている。次に俳句集『湯治船』の中からその様子を見てみる。

いくらでも 出て来る	婆々や	湯治舟	弧川
満汐の 歩板けわしき	湯治舟	田比良	
帆柱に 大根かけ	り	湯治舟	怒愛庵
日中は ゴザ売りもして	湯治舟	良簡	
湯治舟 濯い物干し	留守らしく	方子	
湯治舟 干潟の上に	落ちつきぬ	素十	

俳人の岡嶋田比良は、「別府温泉では一家族あるいは数家族が、湯治期間中に食料品や世帯道具などを積み込んだ自分の持ち舟を波止場につないで、旅館に入らず、その舟から金だらゐ、手ぬぐいなどを下げて共同温泉に浸って湯治する習わしがある。この舟を湯治舟という」と説明している【注13】。

大分市などの他の地域から浜脇、別府に入るには現在でも国道10号線か、高速道路から海に向かって下がる道しかない。明治18年に10号線ができるまでは舟で行く方法しかなく、またその後も海部郡などの道路事情の悪い地域からは、海上交通の方が便利であったため海路は頻繁に使われている。俳人田比良の「食料品や世帯道具などを積み込んだ自分の持ち舟」という説明からと、俳句の中に「いくらでも 出て来る婆々や」と言う表現とで一艘の船の中に多くの人々を乗せた船があることや、また「帆柱につなぎある児や」からは自分の家族のための湯治舟であることなどがわかる。他に湯入講、商売としての湯治舟があり、湯治舟もさまざまな形態があった。

これらを見ていくと防州（周防）に湯入講があったこと、俳句に伊予訛、広島訛とあることなどから、瀬戸内海からの家船であった。

さらに「ゴザ売りもして」とあることから、最高級品として広島県の尾道、福山で生産された備後表を売っていたと推測される。湯治に来て同時に物売りもしていたようである。

5 おわりに

明治27年の別府港船溜まりの観光写真が残っている。茅葺き屋根の湯治舟は、帆柱に住所と名前を書いておけば郵便も配達してくれたという【平野2001 477頁】。この湯治舟という民俗も、句集『湯治船』が世に出なければいつの間にかなくなっていたと考えられる。祖父母の俳句集を、孫の秋吉收氏が2007年に作った冊子『虚子庵椿—別府の俳人 秋吉良聞と方子』を改訂し、湯治舟に関する資料などを加えて出版したことによりその命脈を保つことができた。この湯治舟は家船の人々が行っていた。別府港には舟に暮らす人々が魚を売りに各地から来ており、そこに降りた女たちが売り

歩いた。

別府において湯治舟に関する伝承はほとんどなくなっているが、日本最大の温泉地だったという特性によって観光はがきや宣伝写真が多く残っている。これらを丹念に見ていくと、湯治舟とされる屋根付きの小舟を見つけることができる。これは臼杵に関して同様に、明治から大正、昭和の写真集を見ると、同様に焜炉など生活用品を積んだ小舟を見つけることができる。しかしこれにしても家船、湯治舟という興味、関心の視点を持たなければ簡単に見逃してしまう民俗事象である。

大分県と愛媛県は速吸瀬戸を挟んで約14kmの距離にある。また瀬戸内海も近距離であった。『臼杵博識誌』書かれた臼杵から府内（現在の太田市）までは、今でも船の方が早い。改めて海上交通の自由さを痛感する。

近年、家船に関する資料、伝承が少なくなっているという現状であるが、底を浚うようにしていくつかの事例を求めた。本稿で記したのも、記録しておかなければいつの間にか消えてしまう民俗事象であろう。

注

【注1】大分市佐賀関町一尺屋在住の上田正氏談。決まった時期、場所にやって来ていた。通称ハワイは市街地から遠く、上田氏はカタログギフトの店に勤めており、連絡があると油など生活用品を届けていた。

【注2】秋吉良聞・方子俳句集『湯治船』では「船」と表現されているが、小型の舟であったのでここでは舟と表現する。

【注3】『漢字源』学習研究社 2006年

【注4】『大辞林』三省堂 2006年

【注5】白水は中国・蜀（221年～263年）の川の名。〔中国の白水に潜水の上手な男がいたことからという〕漁師。海人（あま）。『大辞林 第三版』1997年 三省堂

【注6】外耳道に長期間冷水刺激が加わることにより、骨部外耳道の骨が増殖して隆起が生じた疾患。サーファーズイヤーズとも呼ばれる。耳の穴の入り口は軟骨部外耳道で、深部の鼓膜に近い部分が骨部外耳道に相当する。外耳道外骨腫は古くから潜水夫や、頻りに水泳を行う人に多いことが知られている。慢性の冷水刺激によって外耳道の骨増殖が起こり外耳道の狭窄が生じる疾患をいう。

【注7】阿曇氏は海神（ワタツミ）を信仰する一族。安曇族。熱海、厚海、厚見、渥美、出泉、飽海などの地名の起源とされる

【注8】可児弘明の追悼文によると、羽原は大分県直入郡久住に生まれたが、尋常小学校は竹田で通い、滝廉太郎と一緒にであった。また中学校は熊本の済々黌に学んだ。この時預けられた知辺に夏目漱石が訪れ、一日茶を飲んでいったため会うことがあったと先生（羽原）から聞いたとある。（可児弘明「漁業経済史家の晩年」『図書』238号 岩波書店 1969年）羽原は全国の水産漁業史料、古記録を調査、研究、『日本漁業経済史』を著し、昭和30年に学士院賞を受賞している。

【注9】土御門家は室町時代の陰陽師安倍有世（晴明の14代目の子孫）の末裔。

【注10】羽原はここで津留地区に残る瓢箪信仰に対しても畚族との比較研究を提案している。

【注11】2014年現在でも、別府市内の至る所に側溝から湯気が立ち上り、溢れ出るほど湯量は多い。湯量、種類ともに日本一である。

【注12】脇屋儀助は江戸末期に活躍した儒学者脇屋蘭室の祖父にあたる。

【注13】岡嶋田比良は本名坦。明治17年生。大分県速見郡八坂村（杵築）出身の医師で俳人。ホトトギス同人。

[引用文献]

加藤賢成『豊後温泉誌』1888年

羽原又吉『日本古代漁業経済史』改造社 1949年

河南武春『海の民』平凡社 1987年（『民間伝承』第15巻12号 1951年）

羽原又吉『漂海民』岩波書店 1963年

辻井善弥「家船と潜水漁」『講座日本の民俗5』有精堂出版 1980年

野間宏・沖浦和光『アジアの聖と賤—被差別民の歴史と文化』人文書院 1983年

外間守善『沖縄の祖神アマミク』築地書館 1990年

大分県臼津関地方振興局／編『保戸島—まぐろはえなわ漁業の歩み—』大分県 1993年

谷川健一『古代海人の世界』小学館 1995年

福田アジオ・他編『日本民俗大辞典編』吉川弘文館 1999年

梅木秀徳ほか編『目で見える佐伯・津久見・臼杵の100年』郷土出版社 2001年

平野芳弘・清野聡子・宇多高明「古い映像資料に基づく一睡洋性温泉都市別府の海岸利用形態・復元—」『海洋開発論文集』Vol. 17 475-480 2001年

金柄徹『家船の民族誌』東京大学出版会 2003年

沖浦和光『瀬戸内の被差別部落』解放出版 2003年

沖浦和光・川上隆志『渡来の民と日本文化』現代書館 2008年

俳人秋吉良聞・方子『湯治船』自家版 2009年

The history of Ama (a fisherman) in Oita.
“Usuki knowledgeable journal ” and Toujibune
(a ship at a spa to cure a disease)

Hiroko Tabata

People living on the sea – Hyokaimin (people who live on boats), 蜃民 – Danmin (people who have traditionally lived on junks in coastal parts in Southern China) 家船 – Ebune (a group of people who live on boats) about Ama. 漂海民 – people living on coastal parts in the Chinese mainland, Southeast Asia and Japan. The study does not advance about Ebune (a fishing-boat people) now. Ebune came to settle down in fixed places. We can't find any advanced studies of Ebune. I examine two cases in Oita Prefecture, which can be said “Ebune's vestige”. One case is Usukine-hakubutsushi Journal's article on Ama (fishermen) and the other is Tojibune (boats for hot-spring cure) which used to be seen in Beppu. From the article “Usuki knowledgeable journal”, According to the article, I found that Ebune had transferred from Nochi, Mihara City, Hiroshima Prefecture to Suwakakinoe, Usuki City, Oita Prefecture. I also tried to examine the haiku poems about the Tojibune of those days.